

イギリスの Cambridge 大学、Information Engineering の Control Group Ph.D.コースに在籍しております、山本薫です。PhD コースも四年目に入りました。今回のレポートでは、研究がうまくいかなかった時期の葛藤とそこから得た教訓についてまとめています。

---

この十月より PhD コースも四年目となり、先日より遂に博士論文執筆を始めました。今年春まではそれなりに順調に研究が進んでいたのですが、九月か十月ごろより書き始め、クリスマス前に提出、年明けに口頭試問、と考えていたのですが、そこからなかなか思うように研究が進まず、少し先送りになってしまいました。

研究がうまくいかない時期はとてつらく、苦しいものでした。博士論文には、既に得た研究結果の他に、それに関連した新しい結果を加えたい、と思っていたのですが、具体的に何をやるかを決めるのが非常に困難でした。PhD の一年目や二年目とは違い、時間は限られているので、あまりに壮大なテーマに取り組むことはできないけれども、trivial な研究では意味がない。理想は「時間がかかり過ぎず、理論的に意味のある研究」なのですが、そんなものが都合良く簡単に見つかるわけありません。そもそも、大抵の場合は、腰を据えてある程度時間をかけてみないと、その研究がどれだけ難しいか、どれほどの意味があるのかわからないものです。しかし、私はいろいろな可能性を探っているふりをしながら、どの問題にも十分な時間をかけることなく、「あれもだめだ、これもだめだ」と放り出してしまっていたように思います。あまり時間がない、という焦りが余計にこの傾向を助長させ、その結果時間だけが無常過ぎてゆく、という悪循環でした。なんとか突破口を見つけたいと、指導教員に何度か相談をしましたが、指導教員も研究費の申請等で多忙な時期であり、あまり有益なディスカッションはできませんでした。試行錯誤の末、ようやく納得のいく結果を出すことができたのですが、何も生み出せなかった数ヶ月は、不安や焦りとの戦いでした。

今回の経験は、自分が研究者として何をしたいのかを改めて考えるきっかけとなりました。まず、私には、自分の研究の価値を、他人に見出してもらおうという態度が少なからずあったように思います。その結果、自分にとって興味深い研究というものが見えづらくなり、新しい研究内容を模索する上での弊害となりました。他の研究者の評価はもちろん大事ですが、それは迎合して得るものではなく、あとからついてくるものなのだと思います。まずは自分の研究者としての芯をしっかりと持ちたいと考えさせられました。

この三年間を通して、様々な経験をしました。ありきたりな言葉ではありますが、確かに視野が広がった実感があります。残り少ない期間ではありますが、博士号取得に向けて、研究面だけでなく、精神面においても向上していけるよう、精進したいと思います。